

畏怖すべき女神の源流

―最果ての妖婆たち山姥とハッグ妖精―

高島葉子著
三弥井書店刊

ヨーロッパの妖精と日本の妖怪は、それぞれに研究が進められながらも、本格的に比較研究をしたものはこれまであまりなかった。そこに着目した著者は、伝承内容に著しい類似が認められる「日本の山姥」と、「ブリテン諸島のハッグ妖精」の比較検討を本書で試みている。

日本の研究者によって山姥と比較検討されてきたのは主に魔女であったが、魔女よりも超自然的な妖精の方が類似点は多いという。今回取り上げられている「Jagg」は、「妖婆」や「鬼婆」と訳され、醜い容貌の老婆のパンシーやケラツハ・ヴェール等の複数の妖精の総称として知られている。

本書は二部構成になっており、第一部は「畏怖すべき女神」としての山姥とハッグ妖精、第二部は「山姥とハッグ妖精の伝統と系譜」である。博士学位論文を基に一般読者をも想定して、大幅に加筆修正されたものである。

まず、山姥については、妖怪的山姥と女神的山姥に分類し、柳田國男をはじめ多くの文献を博搜して、その多様な性格や機能についてまとめて解説する。同様にハッグ妖精につ

いても、キャサリン・ブリッグズの妖精分類を基準にその多様な様相を詳述する。さらに第一部第三章では、山姥との比較のためにハッグ妖精を新たに分類し直し、山姥との共通点と相違点を浮かび上がらせる。

両者の共通点は、妖怪と神という両義性を有している点にあり、山姥は山の神の顕現形態の一つで、畏怖すべき女神と捉えるべきだと指摘する。

また相違点は、ハッグ妖精が土地や地勢との結びつきが強いのに対して、山姥／山の神は土地との結びつきが弱いことであり、後者は来臨性あるいは偏在性に特徴があるという。

この来臨性は、日本の山の神が山民から焼畑民、さらに稲作民の山の神へと歴史的な変遷を経る中で、常に認められるものだったという。そして山姥の源流は、佐々木高明の論をもとに、北方狩猟民族文化に由来する女神信仰と、中国南部の雑穀栽培型農耕文化と共に流入した山の女神の二系統が存在し、いずれも縄文時代にまで遡ることが可能だと考える。

一方のハッグ妖精は、その名称にゲール語が多く、豊富な伝承地はアイルランドの神話伝説の伝承地でもあったアイルランドとスコットランドの北西部にあるという。これらの土地がかつては同一文化圏でもあったことから、主なハッグ妖精はアイルランド神話の女神に繋がる

と推測する。そして、後期新石器時代から青銅器時代に栄えたブリテン諸島の巨石文化の中で、青銅器時代の「大地の女神／地母神」、ローマ時代へと続く神話にみられる「国土／領土の女神」へと連続的に発展していった系譜にこのハッグ妖精も加わるとみる。

農耕・牧畜によって、日本よりも階層化の速度が速く規模も大きかったブリテン諸島では、部族の領有地への意識の高まりや、祖霊の神聖性をより高める存在として大地の女神も儀礼対象となり、女神と領土、権力の結合が、特にアイルランド島に特徴的に現れたと著者は分析する。

山姥を含めた日本の山の神信仰は複雑で、先行研究も多くその分析や調査研究だけでも大変な量になるが、本書はさらにブリテン諸島のハッグ妖精との比較によって、両者の特徴と歴史的背景を明らかにしている。

他国の文化との比較によって、初めてみえてくるものは確かにある。「あとがき」で触れられているように、昔話の国際話型番号の他には、妖怪・妖精伝承の国際的な共通土台となる分類方法はまだ整っていない。簡単ではないだろうが、比較研究をさらに今後進めていくためにも、その確立が早急に求められている。

(菱川昂子)
二〇二一年三月／本体五八〇〇円

桃太郎の発生

—世界との比較からみる日本の昔話、
説話—

花部英雄著
三弥井書店刊

昔話の研究で知られる花部英雄氏の新著である。「桃太郎の発生」という書名には、著者の並々ならぬ意気込みが感じられる。もちろん柳田国男の「桃太郎の誕生」（一九三三）、石田英一郎の「桃太郎の母」（一九五六）を十分に意識しての命名であろう。

本書は三部からなる。まず第一部「桃太郎の内と外」によって「桃太郎」の起源を窺い、第二部「異類婚姻譚の国際比較」では「蛇婿入」「寸法師」「嫁の輿に牛」などの昔話を諸外国の説話と比較し、また異類婚姻譚における皮（殻）の意味を探る。第三部「昔話、説話モチーフの国際比較」では「菓井長者」「猿地蔵」などの昔話の比較から、イソップ寓話と日本の「鳥獣合戦」の比較、さらには太宰治の「走れメロス」に見える「猶子と人質モチーフ」の検討にまで及んでいる。

本書の中心となるのは、何といっても五つの論考からなる第一部の「桃太郎論」であろう。「桃太郎」について「包囲網を張ることのできる中心の正体を解明することができるか

もしれない」とする著者は、「六人組の世界旅行」(ATU513A)、「猿蟹合戦」(ATU210)、「鬼の子小綱」という昔話との比較を通してその本質に迫っている。著者の「包囲網」のなかで、私はとくに琉球諸島の「桃争い」の話 テコに、「桃太郎」と「猿蟹合戦」の分離独立を説く第三論文、「桃太郎の素性」に共鳴した。

また「嫁の輿に牛」、「猿地蔵」の比較研究も重要な貢献である。両話とも日本の古典に見える有名な話で、昔話としても国際的に広く知られているものだが、意外なことに本格的な比較研究はほとんど行われてこなかったものである。それが著者によって初めて着手された。いずれも今後の比較研究の礎石となるものであろう。

昔話の比較研究、特に多民族にわたる比較研究は、必要が叫ばれながらも敬遠されてきた嫌いがある。おそらくその裏には、比較すべき資料ができるだけ原語で読まねばならぬという考えがあると思われる。もちろんそうすることが理想なのだが、すべての資料を原語で読まねばならないのであれば、昔話の世界的な比較研究は成り立たない。

本書で用いられた比較資料は、すべて邦訳に拠っており、右のような立場からの批判も予想されよう。しかし百年河清を待つよりも、まず

できることから比較研究を推進すべきであるという、筆者の強い意志を感じさせる。そして信頼しうる邦訳のみに拠っても、比較研究が十分に可能であることを本書は証明した。問われるべきは、比較によって何を明らかにすることができたか、ということであろう。

その意味で本書の「猿地蔵」研究は、注目に値するものである。著者は東北地方に伝わる猿を殺してしまうタイプ「猿地蔵」について、柳田国男の「座頭による新案」という説を退け、シベリア・アイヌの類話との比較から、これを狩猟文化の反映と捉え直している。これなどは比較の視点がなければ下すことのできない判断である。

いずれにしても日本昔話の専門家による比較研究たる本書は、今後の比較昔話研究の推進に大きな刺激を与えるに違いない。

はしがきによれば、著者は関敬吾の「昔話の存在は単に一民族的な現象ではなく、超民族的な事実である。従って昔話の研究は特に比較研究を予想するものである。」(『日本昔話集成』「序説」という言葉で「警鐘のように受け止めた」という。本書はこのところ決して活発とは思えない比較昔話研究に向けた、著者の叱咤激励であるように思われる。

(斧原孝守)
二〇二二年三月／本体二八〇〇円

禍いの大衆文化

— 天災・疫病・怪異 —

小松和彦編
KADOKAWA刊

本書は、「自然がもたらす災厄・災害に対して人々がどのように対応してきたのか」ということについて「大衆文化」に焦点を当てたものである。江戸時代の大衆文化に多少の偏りがあるものの、近世や現代の時代の疫病、災害に関しても取り上げている。

現在、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るっているが、近世においても同様に多くの感染症が流行し、人々はその状況下において様々な対応をしてきた歴史がある。本書では第一章、第二章、第四章、第五章、第七章、第八章において、コレラや疱瘡などの感染症を中心に考察が行われている。

第一章（福原敏男）では、コレラや疱瘡が流行した江戸時代に想像された怪異や妖怪を描いた瓦版や錦絵に関する考察である。コレラ流行時にうわさされた「ヲサキ狐」を描いた瓦版では外国からやってきた疫病であるコレラの恐怖を煽り、アマビエやアマビコ、神田明神社使いの童子といった予言獣が描かれた瓦版はそれを打ち払う護符として流行した。また、麻疹が流行すると、今度は「疱瘡

神」が恐れるとされる朱色を基調とした錦絵が登場し、これまた護符としての役割を見せたとしている。事件や災厄を報じるニュース媒体である瓦版や大衆が楽しむために描かれた錦絵が信仰の対象として見られていたことが指摘されている。

第二章（香川雅信）では、江戸時代における疱瘡の流行に関して、人々が疱瘡にどのような対応をしていたのかということ考察している。江戸時代では歌舞伎や浄瑠璃といった娯楽が生まれた。このような娯楽は疱瘡への対応にも使われたとしている。疱瘡は、子どもの頃にかかる通過儀礼的なものとして捉えられていたとし、病気の療養中に遊べるような趣向が錦絵に施されていたという。例えば、疱瘡の見舞い品として流行した疱瘡絵や疱瘡絵本といったものには、昔話の主人公が描かれているなど、疱瘡にかかった子どもが退屈しのぎとして位置づけられていたとの指摘がある。

第四章（高橋敏）では、「今現実に新型コロナナとの悪戦苦闘がつづく中、かつての人々の苦闘の歴史の一面を繙いてみることに」、目下の閉塞状況を考察する上でひとつのヒントが隠されているのではないかと述べているように、幕末にコレラが大流行した際の危機的状况と、コレラに対する人々の対応につ

いて焦点を当てている。コレラは新型コロナウイルスのように突如として出てきた病気であり、感染してしまえば即死とされた。本章では、そうした死への不意識から大衆文化の中から様々な信仰が生まれたこと、コレラはアメリカから持ち込まれたということから「アメリカ狐」のうわさが流れた。ただし、そうしたものを不安視する一方でコレラの恐怖を逆手にとって笑いに変える者もいたことが本章で見られた。

第五章（高岡弘幸）は、「疫病送り」といった習俗に関する考察を落語の「風の神送り」を参考に考察している。内容としては、ある町内で悪い風邪が流行っているのが、「風の神送り」という儀礼を行うことに決め、祭壇を作り、風の神に見立てた人形を担いで川へ捨て、風の神を町内から追い出すというものである。本章では、「風の神送り」を儀礼や娯楽として披露することによって疫病が流行した際のお金稼ぎをする人々がいたことを述べている。

第七章（横山泰子）は、「半七捕物帳」の作者である岡本綺堂の日記に焦点を当て、庶民の疫病感について考察したものである。綺堂は、疫病に関する作品を数多く執筆しているだけでなく、自身も病気がちだったことから、日記にも自分や家族の病気に関する記

録を頻繁につけていたという。綺堂の日記は、昔の人が病気に対してどのような対処をしてきたのがわかるとしている。本章では、特にインフルエンザとコレラを扱ったものを取り上げている。

第八章（香西豊子）は、「衛生」をテーマに明治時代に制作された三点の絵双六（本章では衛生双六）からその様相を探ることが目的だとしている。「伝染病」という人々を不安にさせた疫病が衛生双六という遊戯性のあるものの中でどのように描かれてきたのかと言うことを考察している。

感染症と同様に、近年では地震や大雨による被害も頻発している。また、そうした災害は現代においても正確に予測できない状態であり、震災直後には様々なうわさが飛び交い多くの人々が翻弄される。近年において、そうした災害が起こった際に大衆文化の中でどのような対処をしてきたのかということ、

第三章（小松和彦）では、江戸時代に発生した大地震の際に流行した「鯨絵」に関する考察である。「鯨絵」は、大地震が発生した直後から様々な絵師によって大量に描かれ、人気を博した。それは、地震直後の凄惨な様子や人々の生活を伝えるニュースとしての役割から、災害時の大衆文化を伝える史料であ

るということが本章からわかる。

第六章（齊藤純）では、大雨・洪水などの災害の後にできた「穴」に関する考察である。近年、集中豪雨によって各地で様々な被害が出ているが、昔から大雨・洪水は甚大な被害が出ていた。そうした被害は大蛇が海に抜けることで洪水が起ることという「蛇抜け」という信仰があり、本章では、大蛇が引き起こす洪水伝承の規模を狭くした「法螺抜け」という現象を注目している。

第九章（川村清志）では、東日本大震災のモニュメント（記念碑）に関する考察である。本章では、執筆者である川村が宮城県気仙沼市へ調査に赴き、東日本大震災後のモニュメントの生成過程を調査し、「制度や全体化に正面から抗うのではなく、公的な権力的布置がもたらした制度や環境も取り込みつつ、個別の実践と記憶を担保しうるモニュメントの可能性について検証した」としている。

最後に、伊藤慎吾による「研究ノート 火事・戯文・人名」についてであるが、江戸は火事が頻繁に起こる都市であったことから、火事に関する大衆文化も多く作られた。本章では、一八二九（文政十二）年に、実際に神田佐久間町で起こった火事をふまえて、『仮名手本忠臣蔵』のパロディである戯文『火難 出本焼進蔵』を取り上げ、『仮名手本忠臣蔵』

と『火難出本焼進蔵』の比較を中心に、「とりわけ人名に注目し、擬人物の系譜の中での歴史的意义」に関する考察を行っている。

本書は、冒頭で「災害がもたらす災厄・災害に対して人々がどのような対応をしてきたのかを、「大衆文化」に焦点を当てて探る」とある。新型コロナウイルスの影響からか、本書で取り扱っている内容は疫病に関する事柄に若干偏りがあるが、そうした疫病の流行や、近年、頻発している地震などの災害において、不安を煽るようなうわさが多く出回っているが、それはどの時代も変わらないものであった。しかし、大衆文化の中にはただ恐怖が広がっていくというだけではなく、それを打ち払おうとする信仰や楽しむための芸術・娯楽も生まれている。本書は、コロナ禍における大衆文化というものを改めて考え直したいと思える一冊である。

（川島理想）

（二〇二二年七月／本体二五〇〇円）

日本災い伝承譚

大島廣志編
アーツアンドクラフツ刊

自然災害の脅威に晒される頻度が高まる昨今、殊に二〇二〇年から全世界で爆発的感染を起こした新型コロナウイルス(COVID-19)は、実感を伴いながら今まで人類が体験した疫病を振り返る機会となっている。過去の知識として捉えていた出来事や情報(「明日は我が身」になり、自然災害史が再注目される中、過去の生活者の心情が教訓や知恵として再生された物語は、我々の共有財産といえる。本書は、【疫病/地震/津波/噴火/雷/洪水/飢饉】をテーマに、全国の口承資料から網羅的に各話完結する形で八八話を紹介する。地域ごとに俯瞰できる資料集であり、解説書である。各伝承は、体験から得た創造物として多彩でありつつ、危機管理に向けた記憶保存であるとして理解できる。語りに垣間見える民間信仰や心意に、自然との共存を図ろうとする民間信仰の生に對する執着が窺え、紡がれた物語が歴史の重みを表している実感する。本書を手旅に出ることを勧めたい。現場に立つこと、改めて各話の息吹を感じることだろう。

(内藤浩蒼)
二〇二二年四月/本体一八〇〇円

又シ

― 神か妖怪か ―

伊藤龍平著
笠間書院刊

本書は書き下ろしで、多様な又シについて論じている。著者の伊藤龍平は「日本怪異妖怪事典」(東京堂出版二〇一三)でも「ぬし」を執筆、本書の萌芽が伺える。本書では条件として①②と所々に長く棲んでいること②棲みかである場所が、淀んでいること③その場所から、離れようとしにくいこと。④身体的な特徴があること。⑤尋常ならざる能力を持っていること、を挙げる。「職員室の又シ」など俗語でも使うが、こうした日常語を学術用語にする試みといえよう。この条件④は「巨体になった生物の事」のようにも読めたが、巨体に限らず「異形」ということだろう。先人、南方熊楠も「人柱の話」の中で又シについて言及しており、オサカベやザシキワラシといったものを又シとしているが、本書は古民家や古城を序から触れつつも、そこへの言及は控えてあった。一方、牛に對し馬が又シに控えないのは供物のための指摘は面白く、古城なども含め国際的な比較も待たれるところである。

(永島大輝)
二〇二二年八月/本体一六〇〇円

日本俗信辞典 衣裳編

常光徹著
KADOKAWA刊(角川ソフィア文庫)

本書は長く待ち望まれた続編である。初発は鈴木棠三「日本俗信辞典」動植物編(角川書店、一九八二)のち角川ソフィア文庫、二〇二〇)だ。同書は鈴木氏の指揮のもと、本書の著者・常光氏ら当時の若手研究者らが民俗誌や都道府県・市町村史の事例をカード化して編纂され、散発的に報告されがちな俗信を網羅した事例索引として俗信研究の指標となった画期的な成果であった。同書が動植物編のみであることについて、以前常光氏に「鈴木先生は物品編を構想していたが、叶わなかった」とお教えいただいた記憶がある。先学の志を継ぎ、約四〇年越しの続編として身に着ける物品の俗信を網羅する辞典となっている。多くはかつての民俗文化の衣裳にまつわる俗信であるが、タオルやハンカチ、リボンなど近代以降の衣裳を見立てている点に、現代の民俗文化への接続が立て取れる。物品の俗信は、物品の多様化に従って増えているはずである。車やPCやスマホ等の俗信まで目配りした俗信辞典物品編の編纂は、後進の学徒の義務となるだろう。(飯倉義之)

(飯倉義之)
二〇二二年七月/本体一〇四〇円

徐福伝説と民俗文化

— 地域から東アジアとの交流を探る —

華雪梅著
風響社刊

徐福とは、秦始皇帝の命を受け不死薬を求めて東海に船出した方士（仙術士）である。徐福の出発から渡来、辿り着いた先でなにをしたか、中国・韓国・日本には徐福をめぐりさまざまな伝承があり、長く書き継がれ、語り継がれてきた。現在も徐福伝説は伝承地で生かされ、東アジアで交流を展開している。

本書は中国留學生の著者が日本の徐福伝説を知るため、多くの伝承地から青森県中泊町、和歌山県新宮市、佐賀県佐賀市を選び、徐福伝承地に関わる祭りのいまを中心に、詳細な調査をおこなった。徐福伝説研究では、こうした調査記録が充実しておらず、大きな成果となった。

今回資料として収められた新宮市の徐福顕彰史とも言える「熊野徐福万燈祭の歴史と発展一覽表」も、その成果といえる。これまで公開を不可としてきた新宮市も、既に歴史は中絶していると掲載を許されたようだ。著者は中国でさらに調査を進めているという。その成果にも期待したい。

(達志保)
(二〇二二年三月／本体三〇〇〇円)

「海の民」の日本神話

— 古代ヤポネシア表通りをゆく —

三浦佑之著
新潮社刊

島尾敏雄の造語「ヤポネシア」の視点を活かし、日本海を中心として大陸と向き合う律令以前の列島の姿を描く。現実の目では見ることのできないはるかかなたの土地が神話においてひき寄せられるのは、海の民の広域ネットワークが存在したからだ。筑紫から高志の海沿いは言うまでもなく、諏訪までを女神ナガワヒメによってつなぐ。地形、今日の神社、古墳や出土品も手がかりに、ヤマトを中心とした支配機構から解き放たれることを目指す。

『古事記』『風土記』の伝承を細かく読みながら、時には史学の見解を乗り越え、海の民の交流を考察する。それは三浦の紡ぐところの、翡翠を媒とする「海上の道」である。

高天原から降臨する「垂直的世界観」と、スクナビコナと母神カムムスヒの伝承に代表される「古層の縄文人や海民など」の「水平的世界観」との、混血の結果としての「日本」を、『古事記』を旅することによって明らかにする。

(野村典彦)
(二〇二二年九月／本体一四五〇円)

物語の近代

— 王朝から帝国へ —

兵藤裕己著
岩波書店刊

遠近法の座標軸に「自分」を位置づける近代的自我による近代の小説作法の限界を宣言し、伝承として集合化された記憶であるところの物語、ことばの多義性、隠喩的不透明性を取り戻そうとする。

ラフカディオ・ハーンや泉鏡花の前近代に連なる「語り」「文体」。「平家物語」や浪花節を通じて問われる声、身体。近代を形成した物語にあらがおうとする「もの」のざわめき。近代を批判する視線は、戦後の進歩・発展史観、その影響を受けた古代・中世文学研究に及ぶ。西郷信綱らの「ものがたり（物語）理解」を「近代的な文学観念」による誤解とし、誤解の出発点に柳田國男の昔話論を置く。首僧（座頭）琵琶の語りを聞き重ねた著者は、土地の方言で日常会話をする演者が物語を演唱することばを別に持つことを知っている。「自分のことば」で「自分の考え」を表現する近代人の感覚で物語を理解すること、前近代の声の重層を忘れ「自分」が「声」を出して読みたい」と捉えることに警鐘を与える。

(野村典彦)
(二〇二〇年一月／本体二八〇〇円)

昔話の研究と継承

— 小澤俊夫先生卒寿記念論文集 —

小澤俊夫先生卒寿記念論文集編集委員会編
小澤昔ばなし研究所刊

本書は二部構成からなる。第一部 論文編では、まず「国際昔話型カタログ」のハンズライエルク・ウターが「がちょう番の娘」を、そしてグリム兄弟協会総支配人のベルンハルト・ラウアーがアンデルセンとの比較を論じている。続いて、間宮史子「グリム童話のテクスト変遷」、加藤耕義「天道さん金の鎖」と「オオカミと七匹の子ヤギ」「赤頭巾」「魔女と漁師の少年」、小林将輝「グリム兄弟のライヒャルトとその家族との交流について」、梶村裕子「ちりめん本「日本昔噺」シリーズと『燕石雑志』」、高橋尚子「昔話と創作文学」という幅広く興味深い論稿が所収されている。第二部 昔ばなし大学編は、一九九二年より各地で小澤先生主宰の昔ばなし大学について。北海道の旭川での設立や、沖縄昔ばなし大学再話研究会の活動について、和歌山からは地元の昔話の再話化、浜松の保育園の語りなど各地からの報告を、成田裕美子、田名洋子、額田美那子、山路幸子、阿部眞弓が取り上げ紹介している。

(久保華登)
二〇二二年三月／本体一八七〇円

沼田武男「探訪帖」

— アイヌ語十勝方言テキスト集 —

千葉大学アイヌ語研究会編
千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座刊

沼田武男(一九一四—一九五七)は市井の研究者、著作物は多いが、地元である十勝地方で民俗調査などを多く行なった。その記録は現在、帯広市図書館に所蔵されている。彼の手によるアイヌ語のテキストからは高い言語学的な素養があることが感じられるという。

調査記録のなかでも特に「探訪帖」と題された一八冊のノートには、アイヌの民俗的な聞き取りが多く、そのなかにはアイヌ語による物語一五編が筆録されている。本書は、この物語を翻刻して、アイヌ語の現代表記と日本語訳、注釈を付けたテキスト集である。沼田による欄外のメモなども含めて丁寧に書き起された力作だ。

現在知られているアイヌ口承文芸の記録は地域によって量に差があり、十勝地方のものは相対的に少ない。特に本書に収められた昭和二〇〜三〇年代のテキストはほとんど知られておらず、他に類を見ない。資料的価値があるだけではなく、アイヌ語・アイヌ文化の振興にとっても意義深い記録が刊行された。

(遠藤志保)
二〇二二年三月／非売品

新潟県旧中頸城郡板倉町(口承)民俗誌

— 関田山脈北麓山寺三千坊の地 —

國學院大學説話研究会調査(一九九〇年度)
高塚さより編・刊

本書は、國學院大學説話研究会が一九九〇年に書名の地域で聴いた話を、新たに編集した(口承)民俗誌である。編者自身が聴いた(話)とともに、その他に聴いたこと(編者以外の調査者が聴いた話も含む)は「聴き書きの場と話者」一覽表に収められた。

(話)は聴き書きの場の話の流れがわかるよう、次にどの(話)に続くのかが指示されている。指示に従いページを進める。(話)の途中で、話者は聞き手に梨やモロコシを勧めてくる。途中でテープが切れる。それらを省略することなく、つぶさに記したことで、聴き書きの場の息づきにも気付かされた。編者が本書をこの地域の昔話集とはせずに、(口承)民俗誌とした意図はここにあるのだろう。

三十年前の聴き書きからは、当時の暮らしや人との関わり方が見えてくる。この地域はその後どのように変化しただろう。さらに現在の調査がおこなわれることに期待したい。

(達志保)
二〇二二年三月／自刊